

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学研究科 4年 萬木毬乃

①学習成果

研修に参加する前は、フィリピンパブも、野宿者の方々も、今までに触れたことのない世界であり、恐れや不安を掻き立てる「他者」であった。しかし、フィリピンパブにいるフィリピンルーツの女性達も、野宿者達も、実際には今まで話したことがある人間達と根本的には何ら変わることはない人々であった。研修を終える頃には、最初に持っていた恐れはなく、改めて無知が引き起こす恐怖の深刻さを実感した。

在留資格のない人々と野宿者たちに共通することとして、人間関係に関してシビアな判断を強いられているということが挙げられる。在留資格のない人々は、たとえ同じ国籍を持った相手であっても入管や警察へ通報されるかもしれないという恐れを抱えながら付き合うことになる。野宿者たちも、出会った相手が友好的であれば野宿者の生活を生き抜く知恵が得られることもあるが、そうでなければ、特に女性野宿者の場合は男性野宿者からの暴行といったリスクが高くなる。出会いに関して両者が抱えているリスクは、生死に関わる重大な問題である。そのために、在留資格を持たない子供たちは生まれた時から表だって生活していくことが難しく、昼間に公園で遊んだり学校に行ったりというような私たちにとって当たり前のことすら躊躇われてしまう。親が仕事に行ってしまう中で一人家に取り残されてしまう子供たちの孤独は計り知れない。一見単独で行動しているようにしか見えない野宿者も、周りから隔絶されてしまうと、住所を再び手に入れるための支援を受けることは難しくなる。貧困ビジネスに騙されてしまうリスクも考えれば支援者の手を借りる方が得策である。

マイノリティを孤独にしないことは、貧困や差別を考える上で非常に重要である。今回の研修で得られたような経験のない人にとって彼らは「異質な他者」であり、不安や恐怖を覚える人が多い。しかし実際には、彼らと私たちの間に大きな差異はなく、今野宿者ではない人が野宿者になる可能性は私たちが思っているよりもおそらく高いのだとわかった。貧困も、在留外国人関連の問題も、彼らと同じ目線に立って支援していく行政とコミュニティの抱える、市場と政治的意思が強く絡まったポリティカルな問題である。

②海外での経験

ELCCの校長先生が、「〔支援の範囲を〕うまく線引きをしないと、〔ELCCの支援は〕やっていけないんです」と話していたこと、そして赤塚さんが「中途半端な支援ならない方がましだ」と話していたことが印象に残った。善意で活動していても、金銭的、時間的問題で支援が回らなくなってしまうと支援に依存していた被支援者たちは一気に支えを失うことになってしまう。システムを持続的に機能させるには線引きが必要だ。支援者たちは常にその線引きから漏れてしまった助けられない人たちを目の当たりにしながら、支援をしている。貧困や国籍の問題に向き合っている支援者ほど、助けられない苦しみを抱えていかななくてはならないというところに支援という行為の難しさを感じた。

③プログラム内容

1日目昼は、フィリピン系の子供達が通う学校である ELCC に訪問した。校長とネスターさんのオリエンテーションを受けた後、子供達の授業に参加し、その中で京都に関するクイズを出すなどして子供達と触れ合った。迎えのバスが来るまでの間、中庭で子供達と遊んだ。夜にはフィリピン料理店で夕食を取った後、フィリピンパブに赴き、その実態を目の当たりにした。2日目昼は、野宿者支援団体の「希望の家」に訪問した。野宿者支援を続ける宮崎さんらにお話を伺った後、実際に野宿者の方とコミュニケーションをとりながらの食糧支援に参加した。昼食は野宿者の方が実際に食べている食事と同じものをいただき、より野宿者の存在を間近に感じられた。午後は自らも野宿者でありながら野宿者の支援をする赤塚さんにお話を伺った。

④進路への影響について

支援者たちの声を聞き、支援団体がお互いに情報共有し、協力しあっていくことの必要性を感じた。子供の教育や貧困の問題にアプローチしていけるようなソーシャルビジネスのスタートアップに興味を持った。